

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 富者と貧者

## —ルカ伝第16章19～31節—

1970年2月22日

小池辰雄

富める者 貧しき者 リンカーン 宝を天に積み 霊の貧しき者 地獄の門 モーセと預言者  
キリストの懐の中に入る 即身即主 天国人が地上を歩く コンダクターはキリスト

## 【ルカ16・19～31】

19 或る富める人あり、紫色の衣と細布を著て、日々奢り楽しめり。20 又ラザロという貧しき者あり、腫物にて腫れただれ、富める人の門に置かれ、21 その食卓より落つる物にて飽かんとする。而して犬ども来りて其の腫物を舐れり。22 遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携えられてアブラハムの懐裏に入れり。富める人もまた死にて葬られしが、23 黄泉にて苦悩の中より目を挙げて遙にアブラハムと其の懐裏におけるラザロとを見る。24 乃ち呼びて言う「父アブラハムよ、我を憫みて、ラザロを遣し、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給え、我はこの焔のなかに悶ゆるなり」25 アブラハム言う「子よ、憶え、なんじは生ける間、なんじの善き物を受け、ラザロは悪しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。26 然のみならず此処より汝らに渡り往かんとすとも得ず、其処より我らに来り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵定めおかれたり」27 富める人また言う「さらば父よ、願わくは我が父の家にラザロを遣したまえ。28 我に五人の兄弟あり、この苦痛のところに来らぬよう、彼らに証せしめ給え」29 アブラハム言う「彼らにはモーセと預言者とあり、之に聴くべし」30 富める人いう「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改めん」31 アブラハム言う「もしモーセと預言者とに聴かずば、たとひ死人の中より甦える者ありとも、其の勧めを納れざるべし」。

## ●富める者

今日はイエスの譬話の一つですが、普通は「金持ちとラザロ」の譬話といわれているところですが。「富者と貧者」と題しました。まず始めにそれを文語体で読みます。

19 或る富める人あり、紫色の衣と細布を著て、日々奢り楽しめり。20 又ラザ



口という貧しき者あり、腫物にて腫れただけ、富める人の門に置かれ、<sup>21</sup>その食卓より落つる物にて飽かんとする。而して犬ども来りて其の腫物を舐れり。<sup>22</sup>遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携えられてアブラハムの懷裏に入れり。富める人もまた死にて葬られしが、<sup>23</sup>黄泉にて苦惱の中より目を挙げて遙にアブラハムと其の懷裏におるラザロとを見る。

まあ、そこが第一段でしょう。あるいは、第一幕といつてもいいし、二幕ものの第一幕。非常にコントラストの強い光景です。

「紫色の衣」というのは、非常に高貴な人の着る着物で、私たちも思い出すけれども、昔の何か祭礼のときに、宮中に係わるものはみな紫の色をしていました。小学校のとき、天皇陛下や皇后陛下の写真を拝んだりするような時も、紫の色の幕が左右に分かれて、そして御真影が出てくるというようなわけだった。今の若い人にはちよつと見当がつかないでしょう。

黙示録18章に、

「<sup>16</sup>「禍害なるかな、禍害なるかな、細布と紫色と緋とを著、金・銀・宝石・

真珠をもて身を飾りたる大なる都、

という言葉がある。これは正に富める都の姿です。東京なんか、大百貨店なんかを見ると、こういうところがあるわけです。

<sup>17</sup>「斯くばかり大なる富の時に荒涼ぼんとは」……」（黙示録18・16～17）

「大いなる富が時のまに、瞬間にして荒れすきんでしまうとは」と。最後の審判のところの情景です。

さきほど、マルコ伝のところを読まれましたが、あのところにも、

「富める者が神の国に入るは、駱駝が針の孔を通る方がやさしい」

とありました。新しい方もいらつしやるので、ちよつと言っておきますけれども、「針の孔」というのは、ラクダが非常に通りにくいほどの狭い、そういう「針の孔」という名称の門がエルサレムにあった。本当の針の穴のことではない。いくらキリストでも、そんな譬えは言わないわけなんです。ところが、私たちはずつと本当にキリストはそういうように言ったと思つて、針の穴だと思つていた。これはエルサレムで私は古本屋のおやじさんに聞いたら、さつそくそう答えたんで、

「ああ、そうか」

と今から7、8年前にやつと私は知つた。とにかく、どつちにしろ、非常に困難なことです。

## ●貧しき者

<sup>19</sup>或る富める人あり、紫色の衣と細布を著て、日々奢り樂しめり。

富める者が紫色の衣と細布とを着て——絹やサラサとかの細布でしょう——日々奢り樂



しめりと。

20 又ラザロという貧しき者あり、

こちらの方だけは名前がちゃんとでていいる。ですから、この譬話はただ譬話ではなくて、キリストはある現実を見て、それからこのように言われたので、単なる作り話だとは思われない。

腫物しゅもつにて腫はれただけ、富める人の門かどに置かれ、

何かやつかないおできですね。乞食になつていいるわけです。

21 その食卓より落つる物にて飽かんとする。而してしか犬ども来りて其の腫物を

舐ねぶれり。

まるで犬みたいなのわけです。そしてまた、犬がやつてきて、その腫物を舐めていたという実に大変な光景です。

22 遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携えられて

富める者もほとんど顧みないわけです。うるさい乞食がいるくらいにしか思っていないでしょう。そして、ついにこの貧しい貧困のどん底の乞食は死んでしまった。ところが、御使に連れられて行つた。これは守護天使です。その当時既に、守護天使という觀念があつたわけです。

守りの天使のことはマタイ伝18章にも出ています。18章10節、

「10 汝ら慎みて此の小さき者の一人をも侮るな、我なんじらに告ぐ、彼らの御

使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。」(マタイ18・

10)

即ち、このいと小さい、無きがごとき存在がちゃんと神さまに顧みられて、守り天使がいる。その守護天使は常に父の御顔を見ている。幼児ばかりでなくて、私たちにも守護天使がつく。霊的な歩き方をしていれば、そこに守護天使がつく。

こういうことを言うと、驚く方があるかもしれませんが、ある時、今から10何年前のクリスマスクリスマスの時に、集まつてきた人の後ろにみな天使が二人ずつついた。それをはつきり見た人がある。

そういうことで、天使というものが、何かさういつた存在が聖書に書いてあるとおりに、在る。また、仏教の方でも天女てんじよという言葉があるように。そして、御使たちに携えられて——ちようど何か勝利すると胴上げするように——回りに群れてすーっと上げられていくわけです。その霊的な幻を見た青年は自分がやはり天使に囲まれて、ずーと空中に上がる幻も見た。

御使たちに携えられてアブラハムの懷裏ふとこころに入れり。

「アブラハムの懷」といふ言い方がおもしろい。これは、

「イエスが父の御懷みふとこころに」

というあの「懷」と同じ字です。アブラハムの懷に入った。アブラハムに本当に抱かれる



ように迎えられたことです。

富める人もまた死にて葬られしが、<sup>23</sup>黄泉にて

「黄泉」はヘブライ語で「シエオール」といいますが、旧約の思想では、人が死ぬと、その先は暗黒の場合が非常に多いわけです。詩篇なんかを見てもそうですね。暗いです。

「黄泉においてはいかで神を讃えることができようか」  
なんていう言葉がある。

苦悩くるしみの中より目を挙げて遙はるかにアブラハムと其の懐裏ふところにおるラザロとを見る。

ラザロはもう遙かかなたの上の方です。片一方は地獄の中。

法然上人が小さいときから地獄・極楽の幻を見て、もの凄いのを描いてますけれども。「天国と地獄」というのはやはり霊界のある一つの大事な現実的な消息です。小さい人にそういうことを言うことは、恐怖も生ずるから、あまり結構なことではないですが、ある年齢になったら、霊界というものの、とにかく今までの古典的表現というものはまじめに教えておく必要があると思う。

## ●リンカーン

「貧しき者」ということで、私は、今日2月22日はリンカーンが生まれた日かと思ったら、2月12日だった。ちよつと10日まちがったんですが。しかし、私はリンカーンという人は忘れられない。中学時代に『リンカーン』という本を読んで私は泣いたけれども。非常に懐かしい本です。これがログキャビン、丸太小屋——ここに絵がないんですけど、しばらく私は額に入れて掛けておいたら、どこかへ行ってしまった——丸太小屋に彼は生まれました。1809年2月12日です。丸太小屋は全く貧者の一室二灯です。家は一つの部屋で、また明かりは一つ。そして、窓も戸口も一つ。本当にリンカーンという人は貧しいところに生まれました。お母さんが非常に愛の人であつて、彼を暖かく育てたんですが、お母さんは彼が9歳のときに亡くなってしまふ。貧しいものですから、ほとんど学校に通えませんが、彼は独学です。

まあ、日本はとにかく学校が七面倒臭いですが、もう少し寺小屋式な小さな学校がたくさんあつて、気持のいい自由な、子どもの個性を伸ばすような、その才能を本当に打ち込んで伸ばすような教育をしたいと思う。

私は今度、D中学・高校の校長になりますからね、私立だから、思い切つてそういう線をだしたい。そんなことを今ここで言つて、その通りしなかつたら、どうのこうのと言ふかなんかしらんけれども。

私の志としてはとにかく、平均点が何点以上でなければ及第しないなんていうことはやめて、落第の科目があつても差し支えない。ただし、この子はこの点では伸びる子で、この点が特色という、そういうものは必ず優をとつてもらふ。そういうような精神の教育



をしたいと思う。伸び伸びと一つのことには打ち込めるような、そういう教育をしたい。まあ、中学校はある程度、平均してしなければならない面もありますけれども、高等学校になったら、かなり色をつけていいのではないかと思う。ことに3年生になったら、うんと自由にしてやろうと思っている。

「あれもこれも」

なんてやっていっていると、私なんかあまり、昔の教育で「あれもこれも」なんだから、さあ文科にいかうか、理科にいかうかと迷ってしまった。トランプをやってみて、これが出たら文科にしようとか、バカなことをやってたもんです。私は数学と英語が好きだったから困ってしまった。

話はちよつとそれてしまいましたけれども、リンカーンという人はとにかく、そういう貧しいところに育って、教育らしい教育も受けない。独学し、また労働を非常にいたしまして、本当に鍛えあげた人です。非常に愛の心の深い人ですから、奴隷解放のことに若い時から目を注いでいたらしい。

しかしながら、ナザレのイエスが本当に貧しさのうちに生まれた。キリストの山上の垂訓は、ルカ伝では「心」の字はなくて、

「貧しき者はさいわいなり」

と無条件に書いてある。「貧者」という。

私も5歳のときに父を亡くして母に育てられ、母は5人の子どもを育てるのに大変でした。女学校の先生をしてましたが。普通ならみんなジャムだのバターだのをパンにつけたのに、私はお砂糖をつけて食べたことを覚えてる。友だちがバターやジャムをつけて、うまそうだなあと。一番辛かったのは、悪い友だちが

「おやじなし」

と私のことを言う。

「おやじがない」

と、そういう悪口を言う。その時は本当に辛かった。ランドセルをみんな背負うけれども、私はランドセルを買ってもらえなくて、風呂敷あるいはカバンということでしたが。学校を出るまでは相当苦労しました。

### ●宝を天に積み

けれども、そういう貧しさのうちに、しかし、貧しさを補うものがある。それは代えることのできない世界です。それは心の世界。貧しさは金銭上の冷たい世界ですが、それを補う心の暖かい世界がある。心の暖かさというものは、これは富とは代えられない。どんなに富がありましたも。争いや妬みや、それからいろんな警戒心や、驕りたかぶる心や、そういうものと違って、心の暖かい世界です。乏しいものを互いに分け合って楽しむような、



そういう暖かい世界というものは、これはかえられない。

ここにも書いてあるように、

「日々奢り<sup>おご</sup>り<sup>おご</sup>り<sup>おご</sup>しめり」

と。この富者の奢りの——奢侈<sup>しやし</sup>という言葉がありますが——奢侈驕慢<sup>きやうまん</sup>というものがつきまとう。ところが、それはどういうことになったかというところ、これは地獄に落ちた。片一方は天国である。

「幸いなるかな、宝を天に積む者」

と、キリストの山上の垂訓の中にあるように。

「汝ら、宝を天に積み」

という。6章19節ですね。

「19なんじら己がために財宝<sup>たから</sup>を地に積むな、ここは虫と錆<sup>さび</sup>とが損い、盗人<sup>ぬすびと</sup>うが

ちて盗むなり。20なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆<sup>さび</sup>が損

わず、盗人うがちて盗まぬなり。」(マタイ6・19～20)

信と愛それから、富と争い、富と憎しみ、これがつきものである。

「信と愛」ということで、思い出す人はアッシジのフランシスです。ダンテが、天国篇の第11曲でしたかね、フランシスのことを歌っています。

「その愛人らは、

というのは、互いに愛しているのは、フランシスは誰を愛したかというところ、貧<sup>む</sup>というものを愛した。貧しさを擬人化した。

フランチェスコと清貧であると知れ。彼らの和合とその喜ばしき姿とは、

即ち、ここにも書いてあるように、フランチェスコと貧というものの和合、即ち、フランチェスコは本当に貧に安んじ、貧しさに徹した。それは魂がまた貧しさに徹しているわけです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

ということ。

彼らの和合とその喜ばしき姿とは、愛と耽美と優しき人の眺めをして清き思いの原因

たらしめた。」

即ち、人々がこれを聞いて、愛や本当の驚嘆、また思い遣りの心をそれによって起こさしめるというような意味の言葉です。即ち、貧を愛して、その心が実は非常に豊かに、本当の貧者は本当の富者である。ところが、いわゆる富者は逆に貧者である。正に反対になる。そして、いわゆる富者は富に執りますから——これは「地獄篇」の第4曲に出ている——それは人をけなしたり、憎んだり争ったりする。財、金というものが世の中にいかに悪い悪徳の源になっているか。

そういう意味において、正にこのルカ伝16章の富者はそういった富の代表です。これは



地獄に落ちた。貧者を一向顧みない。

「悪しく蓄え、悪しく浪費する者」

普通の貧者というものはそうだと。これはダンテが「地獄篇」の第7曲のところに書いてある。

「悪しく与え、悪しく蓄えることが

「悪しく与え」というのは、浪費することなんです。何も本当に人に与えるわけではない。「悪しく蓄える」とは非常にけちんぼうなこと。ただ金に執している。

美わしい世界を彼らより奪い、彼らをこの争いに置いた。」

というのは、

「お前はなぜそんなに浪費するか。お前はなぜそんなにけちんぼうか」

と、富者同士で争って、園のあっち側からこっち側へしょっちゅう半円を描きながら絶えざる運動をしているということが地獄篇の中に書いてある。

「人類を乱れしめる宝の空しき戯れを、汝、よく知れ。けだし、月の下にありまたかつてありし

「月の下」というのはこの地球のこと。

すべての黄金もこれら疲れたる魂のひとつをだに憩わしめ得ないのである。」

金というものはどんなにあっても、金のために疲れてしまふ魂を決して安らわせることがない。結局、拝金者流はそれで魂がやせ細り、そして亡びていく。その魂は地獄を勝ち得る。

ところが、貧者は、無一物無尽蔵という。たとえお金があっても、それを私しないで、神のものとして、神有として人のために使うならば、その富者は本質的には貧者であるわけです。そういう人はもちろん天界に行く。金がただ客観的に有る無いが問題じゃない。財を私するかしないか。もし、貧者であっても、

「ひとつ盗んでやろう」

なんて思ったら、その貧者はダメですよ。それは今度は歪んだ貧者になる。

### ●霊の貧しき者

やはり結局、貧とか富とかいいましても、要するにすべて人間の問題は魂の問題にかかってくるのであって、その対象如何の問題じゃない。だから、そこでマタイ伝の

「霊の貧しき者」

ということが大事な言葉です。霊が本当に貧しい。即ち、「自分は何者でもない」ということが、「無者」であるというのが、貧しいということです。自分は何者でもない。神の前には自分は無者である。何ものも私しない。

それが即ち本当に「霊の貧しき者」です。キリストがその最たる者です。何でもキリス



トを見ればいい。キリストは本当に霊の貧しき者です。

「**なんぞ、我を善しと言うか、善きものは神ひとりである**」

「**我は何事も為しあわず。父がなさっているのである**」

と。これはみんなキリストは自分が本当に無力者、無能者、無義者、無教者であつて、即ち結局、一字でいうなら、「無者」ということです。このイエスが徹底的に無者であつたから、無限者、無量者となつた。

私たちは相対的に

「有る、無い」

なんていうことを問題にしているのではない。魂が本当に貧者であつて、何ものも私しないという、その角度にいくならば、即ち、神有として——共産でもなければ——神の**有**としての自覚にあるこの貧者は天国に往く。「霊の貧しい」というのは、逆説的に言うと、本当は霊が神にあつて豊かな人なんです。

「**霊が貧しい**」

ということ

「**霊が豊かである**」

ということとは、そういう意味においては、全く一つなんです。ところが、今の、私が「豊か」と言ったことは、霊が「奢つている」ということと違う。

それが天界に往く。アブラハムの懐に入る。これは現実に乞食でもあるんですけれども。片一方は富める者。けれども、富める者は実は、本当は魂の実に情けなき者だ。正しい意味における乏しきということではなくて、本当に情けなき魂。そういうのは地獄へ往く。そういう審きです。要するに、利己主義者、エゴイズムの人間です。

### ●地獄の門

<sup>23</sup>黄泉<sup>よみ</sup>にて苦惱<sup>くるしみ</sup>の中より目を挙げて遙<sup>はるか</sup>にアブラハムと其の懐裏<sup>ふところ</sup>におるラザロ

とを見る。<sup>24</sup>乃<sup>すなわ</sup>ち呼びて言う「父アブラハムよ、我を憫<sup>あわれ</sup>みて、ラザロを遣<sup>つか</sup>し、

その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給え、我はこの焰<sup>ほのお</sup>のなかに悶<sup>もた</sup>ゆるなり」

地獄の炎の中で悶えている。

「その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給え」

というんですから、非常に大変なことです。キリストは、そういった地獄界の消息も見えないからです。

<sup>25</sup>アブラハム言う「子よ、憶<sup>おも</sup>え、なんじは生ける間、なんじの善き物を受け、

ラザロは悪<sup>あ</sup>しき物を受けたり。今ここに彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。

「地上の天国にお前はいたが、今度は霊界の地獄へ行くんだ」



と。片一方は地上の地獄にいたが、今度は霊界の天国に行くというわけです。ところが、地上の天国なんていうものは本当の天国でないわけです。

<sup>26</sup>然しかのみならず此ここ処こより汝らに渡り往かんとすとも得ず、其そこ処こより我らきたに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵ふち定めおかれたり」

天国と地獄の間には、越えることができない、橋のかかかっていないところの深淵がある。これはどうにも渡りようがない。

ダンテが『神曲』の第3曲の始めに、地獄の門のところにそう書いてある。有名な句ですから、ちよつと読みましようか。「我」というのは地獄の門です。

「我をよぎりて憂愁の都へ

我をよぎりて永劫の苦しみへ

我をよぎりて滅亡の民のうちへ

正義わが高き創造主を動かし

神の力、至高の知恵

また本源の愛、我を造れり。」

と。これが地獄の門に書いてあつて、地獄はそのようにして厳然として在る。

「永劫の者の他

我より先に造られしものなく

我はまた永劫に続く。

一切の希望を捨てよ

汝らここに入る者。」

と。この地獄に入ったら、もう希望はない。絶望の世界だと。

煉獄は、それに入ったら、浄化されて天国に往く望みはあるけれども、地獄は、その中には望みがないというわけですね。けれども、

「どの人が地獄に入るか、煉獄に往くか、天国に往くか」

これは神さまだけが知っている。

### ●モーセと預言者

<sup>27</sup>富める人また言う「さらば父よ、願わくは我が父の家にラザロを遣したまえ。

<sup>28</sup>我に五人の兄弟あり、この苦痛くるしみのところに来らぬよう、彼らあかしに証せしめ給え」

<sup>29</sup>アブラハム言う「彼らにはモーセと預言者とあり、之に聴くべし」

「モーセと預言者」というのは、言うまでもなく、旧約聖書のこと。当時の聖書ですよ。

「まず聖書をしっかりと読んで、それに従わない者は、何を言ってもダメなんだ」と言つて、はっきり答えてしまった。

<sup>30</sup>富める人いう「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、



悔改めんくいあらた

そういう、

「先のことを見通して、やれ悔い改めるのどうのこうのというのはダメだ」

と。先のこととは知らんが、とにかく、現実を本当にモーセと預言者によって生きていけば、その先は恵まれる。

「その先がどうなるから、こうする」

というような、そういうった功利主義ではないというようなわけだな。

<sup>31</sup>アブラハム言う「もしモーセと預言者とに聴かずば、たとい死人の中より

甦すすえる者ありとも、其の勧めを納いれざるべし」。

そういうことを言っても、結局ダメだと。

この話におきましては、もちろん、キリストはこの旧約聖書の、

「律法の一点一画をもゆるがせにできない」

という、その角度において強く語っておられる。けれども、

「キリストの福音を受ける者は、どんなに小さき者も預言者よりも大きい」

という言葉がありますように、我々はこのキリストの譬話を新約の光で見るときは、今度は、

「モーセと預言者」のかわりに「福音」と言いたいところです。「旧約聖書」と言う代わりに、

「新約聖書」と読むべきところです。

即ち、律法の一点一画をもゆるがせにしないように、この律法の義をもし私たちが求めたら、

「律法の義によつては誰も本当に救いには来たらぬ」

とパウロが散々言っているとおり、パウロ自身が

「私は律法の義については、責むべきところのないほどのチャンピオンであつ

たが、そんなことで自分は救われたのではない。そんな義はもう塵芥のよう

に思うに至つた」

と、ピリピ書に書いてあるとおりで。

## ●キリストの懐の中に入る

我々にとつてはこのキリストの譬話は、

「アブラハムの懐」

の代わりに、今度は

「キリストの懐」

になるわけです。それでは、

「キリストの懐の中に入るためにはどうしたらよいか」

と、皆さんが思つて、



「さあ、これは大変だ。聖書をしっかりと研究し、勉強し、聖書研究会を開いて、それから、実存をしつかりして、よく隣人を愛して」

なんて言って、新しい律法をつくったって、それはダメだ。聖書の研究も、いくらでもやってくださいよ。けれども、研究でどうなるものでもないことはもう分かりきっている。しかし、まじめに勉強することは大いにしてください。聖書はとにかく、地道に勉強したらいい。どの角度からも勉強して結構です。

けれども、

「聖書を食らい飲む」

ということが、それと矛盾しないところの消息をそこにもっていないくはダメです。やがてキリストの懐に入るのではなくて、

「地上にあつて既にキリストの懐に入っている」

その生き方をしなかつたならば、我々にとつてこの譬話は本当に生きてこない。

即ち、私たちが相対的に富んでいるとか貧しいとか、そんなことはもはや問題ではない。心の富める者、そういう富者にはなつては絶対にダメである。それは富を惜しむ人になる。自分の才能を惜しむ人になる。社会的地位を惜しむ人になる。財産を惜しむ人になる。そういう富者は、とにかく、何でも自我中心に「自分のこれは」というものを惜しみ保っているよう人は、みなこれを富者と言う。芸術家も自分の腕前を誇っていたら、これは富者でダメです。

自分は何も書けない。ただキリストの御言、御霊に生きるときに、何かしらんが動いていく。もちろん、技術はありますよ、技術はあるけれども、技術が書くのではないんだ。本当の書くものは、その奥からくるところのものが書かしめるんだから。

それは富者にはできない。それは貧者とならなければできない。本当の学者も、詩人も、あるいは医者であろうと、実業家であろうと、また台所で働こうと、編み物をしようとして、何をしようと、私たちは貧者に徹しなくてはいかんわけです。

貧者は、もうひとつ言い換えると、さつきから言っているとおり、「無者」です。無者と言った方がなおはつきりする。貧者、即ち、無者。ニヒリズムのようだが、そうではない。

### ● 即身即主

この貧者は、一体誰であつたか、その最たる者は。さつきから申し上げているとおり、ナザレのイエス・キリストであつた。キリストが徹底的に貧者、無者であつたから、彼は父の懐にいる。アブラハムの懐ではなくて、イエスは父の懐にいる。彼が

「父よ！」

と言うときには、彼は懐の中に入ってしまう。「父よ」と呼んだその時に、祈りの世界で「父よ」と言うときに、既に父の懐に在る。これが本当の祈りの世界です。



私たちが「主よ」と言うときに、主の中に入っていないかったら、まだその祈りは本ものではない。ウソとは言わないけれども。ウソと本ものの間くらいだ。

「主よー」

と言うときに、本当にキリストの中に即入る。だから、私が「即身即主」と言っているでしょ。そのまま主に即する。

「そんなことを言ったら、それは神秘主義ではないですか」

なんて人が言うが、冗談言っただけか。この「即」には何がかかっているかというところ、十字架がかかっているんです。十字架がこの「即」の字ですから。十字架せられたるこの身、この十字架によって贖っているキリストに即するんです。それが即身即主という意味です。あの第6号（『曠愛新書』）の「即身即主」のところをよく読んでください。あれは大事な文章ですからね。

皆さんは、

「私が書かない」

と言うけれども、あなた方がよく読まないから、書かない。第1号から6号まで卒業したら、書くことにしような。試験でもしてから、及第した人には第7号（ピリピ書「一切の秘訣」）を読ませる（笑）。これは冗談ですけどもね。本当ですよ。たまには、誤植でも見つけてね——何も誤植を見つけるために読むのではないけれども——

「先生、これだけの誤植がありました」

なんて、誰も言っただけで来やしない。

そういう、即身即主ということ。それが信に徹する。「徹する」と言っただけで、

「なかなか私は徹しません」

ではない。ちゃんと徹しているじゃないですか。それが十字架だと言っているんです。十字架が私たちを無者としているじゃないですか。

「お前はもう、十字架で無者にしてやったんだ。何をゴタゴタしているかね」

と。もうはつきり、根底から贖いとって、自我というものを、我執というものを、罪は処分してしまった。何のための十字架ですか。

「キリストの十字架、十字架」

なんて言っているけれども。はつきりと贖いとられ、わが過去も現在も未来も贖いとられているところの私たちなんです。そのキリストの十字架をしっかりと受けとるためには、あなた方は本当に一晩中、沈黙の祈りをしたっていいですよ。それくらいのことをやってみなくては。ある時は、山に籠もって、気遣いと思われくらいに祈ってごらんさいよ。

「本当に自分はこのキリストの十字架を受けました。もう何もこわくない」

と。何の心配もなくなる。それで、その無は、キリストは放っておかない。絶対に放っておかない。それはもう、すーっと聖霊がくる。



「われキリストと共に十字架せられたり」

と、パウロと共に言えるようになったならば、

「もはや、われ生くるにあらず」

という。「われ生く、されどわれにあらず」と、本当はそうなんだ。

「われ生く。されど、われにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と。

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

「われキリストの中に生くるなり」

は同じことです。これが「キリストの懐」というんです。「キリストの懐」は、あのガラテヤ書2章20節において私たちがはつきりとかかめるところの事態です。

地上にあつて既に天界にある。地上にあつて既に天界にある天国人とはつきりなっていなければ、「クリスチャン」なんて言えないんです。「救われている」なんて言えない。「永遠の生命」なんて言えない。これを本当に受けとっていなければ。しかも、それは絶対無条件に誰でも入れる現実である。

「絶対無条件に誰でも入れるのが最高最深の世界だ」

と、私は言っているでしょ。

「向こうが十合目だったら、こっちは二合目くらいでお終いか」

なんて、そうじゃないですよ、こっちも十合目まで行ってしまふんです。質的には、偉大なるパウロとこのダメな小池とは一つなんだから。キリストに贖われている現実には差別はない。親鸞や何かの本を読んでごらんさい。仏の世界だって、同じことを言っているから。だから、私は、

「なぜプロテスタントだのカトリックだのと言っているか。いきなり使徒たちのと

ころへ行け。使徒と共にキリストの中に入れ。使徒的信仰に私たちは即身してい

こう。それが本当の前進になるぞ」

と言っているんです。

### ●天国人が地上を歩く

この貧者とは、何と楽しいかな。

「一簞の食、一瓢の飲」

という言葉もある。瓢ひょうたん一つの飲み物と弁当箱一つの食べ物。そういうように、昔の坊さんは豆腐と何とかで、何も栄養なんて言わなくなつて、ちゃんと長命であつた。まあ、今と社会環境がいろいろ違うからどうのこうのと相対的な議論もあるでしょうけれども。

しかし、魂が澄んでくると、一番おいしいものは水なんです。コーヒーでも紅茶でもない。大体、お砂糖をいれて飲むものは大したものではないんだ。やはり、東洋のものの方がい



いですよ、東洋のお茶の方が。茶道なんて、やはり言うわけだよ。大体、日本に本当は素晴らしいものがあったのにな。もういい加減でもとへ本道に戻ったらいいですよ。そして、本当の福音の角度から前進した方が。

私たちはもう既に地上にあつて——ラザロは死んでからアブラハムの懐へ入ったけれども——我々はもう地上からキリストの懐の中に入る。いわゆる地獄・天国なんてものは超越してしまつて、本当の天国、パラダイスに毎日いるわけです。天国人が地上を歩いているというわけだ。

だから、私たちは本当に永遠の兄弟姉妹であるというのは、そういうように贖いとられて、もう絶対界の人である。私の信仰はずぶといからね、そこまで行かなければ承知しない。あなた方もそうだろうと思う。それでもうはつきりしたでしょ。

だから、何と言つても、キリストです。福音書のキリストを、よく福音書を読んでくださいよ。マルコ伝なら1章から13章まで、グーツとドラマのように展開していく。それくらい読まなくては。気違ひみたいになつて。聖書の読み方もヘツタクレもない。もうそういうようにして、本当にこのドラマの中に自分を入れる。

もうひとつは、このパウロの書簡です。パウロの書簡の重厚な構造をしつかりわきまえていれば、どんな思想がきたつてビックともしない。重厚な福音的な骨格と、それから脈々たるところの福音の血。神経が通つている。そういう有機体です。

即ち、我々の身体も骨と肉と血とからできています。そのように、我々の福音の構造も、重厚な構造と、それからそこに本当に福音的な血の通つている、霊血の通つているところの、そういう読み方をもつて、即ち聖書が化体かたいすることです。身体に化することです。御霊と御言は離すことはできません。それを化体して読んでいく。

いいですか。毎日読むときに、ある一つのところを読んだら、そこが本当に自分の血となり肉となつたかということ——「成つたか」ということを反省するのではない——成るように祈り心で読んでいくということが大事です。

### ●コングクターはキリスト

そうしたら、もうここでどうのこうのと言うようなことが本当になくなつてしまつて、我々が、ここで「モーセと預言者」「旧約聖書」と言つていことが、即ち

「キリストと使徒」

だ。主キリストと使徒。この使徒的信仰を、イエスの生命そのものを受けとつたならば、もうその先は聞かなくてよろしい。もう既に天界にいるんだ、こっちは。黙示録的な素晴らしい世界がやがてくる。そうすると、時には素晴らしい夢を見るよ。私は今年になつて、素晴らしい夢を一遍見た。そういうことになります。そうしたら、既に甦りの生命ですから。



そこで、さつき言いましたようなフランシスは本当に天界に行つて、その「貧」とは即ち、自分が本当に無者となると——キリストの無限無量なものは愛の豊かな世界です——キリストの愛の生命があふれてくる。貧と愛とが実は一つの事柄の表と裏であった。

また、神さまは、無くてならないものはその時その時に本当に備えてくださる。二つや三つのお魚やパンを五千人に与えるように。あれは一体何を表しているかというところ、いかに乏しいものの中に、これを種として神の創造の生命は何と素晴らしい展開をするか。

私たちの中に芥種一粒というキリストの信が、御霊が入ってきたら、これはいかに無限の力をもつて人々を幸いにしていくことか。一人の人が救われることが、何人の人の救いの基となるか。

あなた方が本当にそのような、存在的にはつきりと証し人となつていくと、あなた方が、我々が地上を去つてから、その在り方が実は一番深い伝道になつてくる。私の兄貴がそのようにして、ただ一人休れて行つたが、それによつて私が救われ、皆さんの救いへの橋になつたわけです。

それが本当に

「宝を天に積む」

ことである。愛をわかつことが、キリストの生命をわかつことが、宝を天に積むことである。そのキリストの生命をわかつためには、キリストの懐に生きていなければ。活けるキリストの懐に生きているところの生き方。そうならなければ、もう寂しいことはないですよ。

「徳は孤ならず」

と言うけれども、本当の生命のあるところ、本当の愛があるところには必ずそこに仲間が生ずる。複数になる。交わりの世界。これがコイノニアです。コイノニアというのは何も社交的なことを言うのではなくて、生命はコイノニアの構造にならざるをえない。

私たちの集会は、そのようにして行く。皆さんは、もうみんなこれは千差万別だよ。それをどうのこうの言つたつてしょうがない。しかし、その中に、皆さんの中にキリストが入ると、それぞれの善さがみんな見えてくるから。そうすると、お互いにその善さを尊重しながら、聖名を讃えていくということに自然になつていく。これが本当の交響楽です。シンフォニー式な存在がそれぞれの響きを発している。なかには太鼓みたいなやつがいるし、なかには非常に繊細な響きの人もあるし、みんなそれぞれだよ。

「あれは太鼓だから私は困るな」

なんて言つては困る。太鼓は響くときがあるんだからね、しょつちゅう響いていたらこれは困るよ笑。そこはみんなわきまえてもらわないとね。コンダクターはキリストですから。キリストをコンダクターとして、私はどういう時にどう響くべきかということを目ざらわきまえて、ひとつやつつしていけば非常に結構なことです。では、今日はそこまで。

